

ヨーロッパにおける森林資源の現状と人々のかかわり

前ブラッセル日本人学校 教諭

香川県綾歌郡宇多津町立宇多津小学校 教諭 勝田 健彦

キーワード：森林，環境，林業，余暇，ヨーロッパ

1. はじめに

わが国においては、古くから森林と関わりが深い文化を育んできたと言われるが、近年は豊富な森林資源を有効に活用できなくなり、質の悪化が問題になっている。森林率としては、他国と比較しても非常に高い数値を誇っているが、そのことへの認識は低い。

世界的に地球環境への関心が高まる中であって、森林の減少、とりわけ熱帯林の減少が問題視されている。学校教育においても、地球規模での環境問題がとり上げられる機会が多い。一方、身近な森林について学ぶ機会が多いとは言えず、森林への意識が遠ざかる要因になっているように考えられる。

世界的に見ると森林面積は減少傾向にあるが、ヨーロッパにおいては森林面積を増加させている国が見られる。環境への取り組みでは先進的な事例の多いヨーロッパにおける森林資源の現状と人々の森林とのかかわり方を学び、帰国後の環境教育に資する研修を行いたいと考えた。

2. ヨーロッパの森林資源の現状

(1) 主なヨーロッパ諸国の森林の現状

統計資料や現地視察から次のようなことが分かった。

ベルギー・ルクセンブルグの国土に占める森林の割合は22.9%である。比較的平坦な土地が多く、古くから全土にわたって開発され、農業的土地利用が優位である。このような傾向は、ドイツ(31.7%)、フランス(28.3%)なども同様である。また、英国(11.8%)、オランダ(10.8%)のようにきわめて低い国もある。近年の推移を見ると、ヨーロッパでは森林面積がわずかながら増加している。

一方、日本は68.2%であり、フィンランド(73.9%)、スウェーデン(66.9%)と世界的にも高い北欧の2カ国とともに工業先進国の中で突出している。このように森林が充実している国は世界的にも稀である。(FAO, Global Forest Resources Assessment 2005.) 日本の土地利用は、地形が急峻な中山間地域に森林があり、人口が集中する都市部に近接する地域ではほとんど緑が無いことが特徴としてあげられる。ヨーロッパでは都市に緑の公園があり、森林が近郊に広がっている例が多い。ヨーロッパでは森林を開墾して農地が開かれたり、燃料として大量に必要とされたりしたため、中世以降ヨーロッパの森林は大きく衰退していったとされている。森林面積の割合は小さいものの、よく管理された森が多い印象を受ける。森林と農地、都市との境界は直線的であり、人為的である。

(2) ヨーロッパの自然観

文献資料から、ヨーロッパにおける自然観について、次の点が分かった。

グリム童話、アンデルセン童話に見られるように、伝承、民話には森が登場することがよくある。森は恐怖の場所でありながら、日々の食料や燃料を供給してくれる場所でもあり、人間の生活と関わりが深い。

ドイツでは、森は人間によって支配されるべきものとして、人の手を加え管理してきた。恒続林という考え方が根づいてきた。明治期の岩倉使節団の訪欧においても、ベルギーの森林を視察し、乱伐を慎み、継続的に森を利用できるような経営が紹介されている。使節団はヨーロッパの森が国家の強い統制下に置かれていることにも関心を

示したとされる。ベルギーでは森をいたずらに伐り、農地にすることを制限する法律が定められており、国家によって自由が制限されることも場合によっては必要だと説明されたようだ。

ヨーロッパでは都市と森林が近接していることが多い。ヨーロッパの都市には公園や緑が不可欠だと考えられてきた。国土面積に占める森林の割合は大きくないものの、都市の周辺にあっても公に開かれた森林が存在し、人々の生活と結びついている。

(3) ヨーロッパの林業地域

日本の木材供給は輸入に大きく依存している。輸入相手の中で近年割合が増加しているのがヨーロッパである。その中心になるのは、フィンランド、スウェーデン、ドイツ、オーストリアなどである。ドイツにあっては人工林面積が日本とほぼ同じながら、木材の生産は3倍と言われる。これらの国々では管理の行き届いた林業経営がされている。ヨーロッパでは、都市の中心部を除き、木造住宅の割合が多く、家具、生活雑貨に木製品が使われることが多い。また、暖房の燃料として木材が活用されている。

ヨーロッパの自然条件は林業に適している。地形は比較的平坦で、山間部にあっても日本のような急峻な地形は少ない。植林から伐採・搬出の作業において有利である。冷涼な気候のため雑草が少なく、樹木の生育に有利である。温帯に属し湿潤な日本では、林床に雑草が繁茂し、森林の再生を妨げている。

ドイツとオーストリアは、ヨーロッパの中でも先進的な林業国であり、世界的な森林の減少傾向にあって、森林面積が増加している国である。黒い森と呼ばれるドイツのシュバルツバルト、アルプスに位置し美しい景観のオーストリア・チロル地方は、その有数の林業地域である。シュバルツバルトは、美しい針葉樹林の森林が広がるドイツ南西部の広大な森林地帯である。樹種のそろった、よく整備された森林である。市街地に近い場所や、道路から森林に入る入口付近には、駐車スペースやベンチがあり、気軽に散策を楽しんでいる様子が見られた。森林は農地、牧草地と隣接しており、農家は家畜を飼育している。シュバルツバルトにおいては、日本に見られるような隔絶された森林は少なく、都市が点在し、その周辺に森林が広がっていることが多い。森林は一定の広がりを持ち、日本のように集落が森林地帯に虫食い状に見られることは少ない。

オーストリア・チロル地方は、シュバルツバルトよりも地形が急峻である。針葉樹林の純林が多い。谷筋に都市が点在し、幹線道路がこれらをつないでいる。これらの都市には木材加工所、木材集積所などの施設が多く見られる。豊かな山岳景観を生かした観光産業も盛んであり、夏の保養地として、トレッキング、スキーなどのアウトドアスポーツの拠点として賑わっている。地形が険しいが、鉄道や道路交通網が充実しており、森林がよく整備されている。産業としての林業がうまく機能している感じが感じられる。

このように、ヨーロッパでは日本よりも資源としての木材の重要度が高く、森林と人々の生活の距離が近いように感じられる。林業のさかんな地域では、産業として持続されている。また、都市の人々の森への関心も高い。

3. ベルギー・ブリュッセルの森林

(1) ブリュッセル市の森林・緑地の状況

ブリュッセル市はベルギーの首都であり、EU本部がある都市である。市中心部は都市的機能が密集しており、市街地が放射状に広がっている。しかし、市内各所には森林、緑地が多く、特に環状道路であるRing周辺には豊かな森が広がっている。面積の4分の1が森林や公園と言われるほど緑に恵まれている。その大半はかつて公爵や王室などの領地であり、狩猟などに使われていた。現在、森林や緑地は、市の環境局によって樹木をはじめ、草花、歩道等の手入れが常に行き届いている。案内図、標識もよく準備され、森での滞在を楽しむための環境整備がなされている。冊子やリーフレットが豊富に用意され、アクティビティも充実している。

市中心部に達する広大なソワールニュの森が北西部カンプルは、町の中心に近く都市的な土地利用と森林が隣接し

ている。樹種は様々であり、落葉広葉樹が多い印象を受ける。夏は葉が生い茂り緑の鬱蒼とした森になる。冬には葉を落とし、林床まで明るい日差しが差し込む。日本のように下草が繁茂することもなく、木々がゆったりした間隔をとって立ち並んでいる。池の周りに芝生があり、散策路が整備されている。休日には貸自転車コーナーが開設され、多くの人で賑わう。ウサギ、リス、水鳥などが生息し、人間に害を与えるもの、嫌悪感を覚える生物はほとんど見られない。このようなことも日本と違い、人々が森に親しみやすくなる要因である。



乗馬も気軽に楽しめるブリュッセル近郊の森

(2) ベルギーにおける森林と人々のかかわり

① 森林でのレクリエーション

ブリュッセルの人々は、森に親しんでおり、休日には多くの人が森を訪れている。ジョギング、散策、日光浴、自転車、乗馬等、思い思いの楽しみ方で森での休日を過ごしている。森は年齢を問わず市民に親しまれている。現地の学校が休みになる期間に行われるスタージュ、日曜日のボーイスカウト・ガールスカウトの野外活動などで子どもたちが森で遊ぶ姿が見られる。ネイチャーゲーム、オリエンテーリング、広場でのスポーツ、乗馬などである。

森林は、落葉広葉樹、針葉樹の混合林が多く、季節毎に違う光景が見られる。また、きのこ狩り、栗拾い、花見等、季節の楽しみもある。都市に隣接しているため、休日の遊び場所として子どもたちにとっても身近である。日本で見るとよりも森林に親しみ、生活の中に森林が入り込んでいる感がある。

② スポーツ・イベント

スポーツを通じて、森林に触れる機会が多いのも、ベルギーの人と森林とのかかわり方の特徴である。ベルギーではマラソン・ジョギングの大会が多く開かれ、冬季と夏季のパカンス以外の時期、ほぼ毎週どこかで大会が開かれている。市街地を走るものもあるが、近郊の森林内をコースにしたものも多い。森林を舞台に開かれるジョギング大会は人気で、早々に定員を超過し申し込みが打ち切られる大会も少なくない。どの大会も、参加者のレベルは様々で、誰もが気軽に参加し、森の中を走ることを楽しむ雰囲気があった。

ベルギーではクロスカントリースキーが盛んであり、特に東部の町リエージュ近郊からドイツ国境にかけての地域にコースが集中している。これらの地域は、ベルギーの中では積雪の多い地域である。平坦な国土にあって、この地域は標高500～700mの高地である。林業がさかんであり、コースは森林の中を縫うように設定されていることが多い。よく維持管理され、美しい針葉樹林が広がっている。林業としての森林以外に、クロスカントリースキーに、森林の散策にと、地元の人や観光客に対して開かれている。

③ 森林のレクリエーション施設

ベルギー国内には、気軽に利用できるレクリエーション施設が多い。遊具が配置されているだけで自由に利用できるものから、森林について学ぶセクションがあるもの、インストラクターが指導し有料で冒険度の高いものまで様々である。よく整備され安全に配慮されているので、大人から子どもまで楽しめる。

このように、人々は森林で過ごす余暇の時間を使って、森林や自然に親しみ、学んでいる様子を感じられる。家族と森林で過ごす時間も、成長に大きな影響を与えていることだろう。また、森林の場を使った野外活動等を通じて、人々のかかわりを経験し、成長していくようだ。



土壌の浄化作用を体感できる装置

都市の森林は、木材、燃料を供給する機能は小さいものの、人々の成長においても重要な存在と言える。

4. 総括

(1) ベルギーの人々と森林

人々は日本よりも自然に森とかかわっているように感じられる。このような相違を生む要因として、まず、都市に隣接した森林の存在が挙げられる。森林や緑地が至る所に見られ、日常的に活用しやすい環境にある。通勤通学の経路に森林や緑地を利用する人も多い。イベントが行われることも多く、森に入る機会が多い。

次に、森林の所有形態の相違が挙げられる。都市に隣接しながら森林が都市的土地利用に変えられないのは、その多くが公爵や王室などの領地であり、公的な所有であることによると考えられる。このため開発から守られ、適切に維持管理されている。歩きやすい遊歩道、遊具、広場等が整備されている。

また、気候等の自然条件も大きな要因である。人間にとって危険なものや不快感を与える生物がほとんど見られない。また、雑草の育つスピードが遅く、森林の維持管理が比較的容易である。地盤も固く、傾斜も緩やかであることが多いため、土砂災害による森林の破壊や荒廃がほとんど見られない。

森林が身近にあることで、間伐や下草刈り等の作業を目にする機会が多い。森林は自然のままにあるものではなく、手入れされることで良好な状態の森林が持続していくことを理解することができる。身の回りの森林は良好な状態に保たれており、世界的な規模で森林が減少していることは、実感として感じにくいようだ。

(2) 日本における人々と森林

森林は林業の資源として重視されてきた。林業の衰退とともに森林を整備することが難しくなっている。特に私有林においては、維持管理をすることが難しく、多くの森林の荒廃につながっている。この結果、森林面積は維持しながら、森林蓄積量が増え続け、林業資源としての価値の低下を招いた。

近年環境問題に関心が強くなっている。特に地球温暖化の一要因とされる熱帯林の減少には意識が高い。しかし、国内の森林の状況には関心が低い。国内においても森林が減っていると考えた人が多いし、森林を伐採することを悪とする認識も多く見られる。森林の機能として、温室効果ガスを吸着したり、土壌流出や土砂災害を防いだりすることを過度に期待されている傾向も感じられる。森林の機能が有効に働くためには、適切な管理が不可欠であり、荒廃した森林においては、逆効果であるとの説もある。日本の森林は大部分が人工林であり、適切に管理することによって、持続していくものである。適切に管理するためには、適度に間伐をしたり、適齢に達した樹木を伐採することが必要になる。林業の衰退はこのような点からも問題である。学校教育において林業を学ぶ機会はずかしくあっても、林業より環境を守る機能に重点が置かれる傾向があり、森林について正しく理解する機会にはなっていない。

ベルギーでの滞在期間中、身近な森林から近隣の林業地域まで、ヨーロッパの人々の森林との関わりの一端に触れる機会を得ることができた。

森林をめぐる状況は、一概に日欧を比較することはできないものの、森林管理のあり方、人々の森林との接し方は対照的であった。森林に恵まれた日本よりも、ヨーロッパでは森林は都市に近く、気軽に森林と親しむ場所、機会が多くあり、生活と非常に近い関係にある。森林で様々な体験をする中で、森林に対する認識を築いていることが分かった。また森林の維持管理にも社会全体で力を入れていることが窺える。このことは森林を良好な状態で維持する上でも、人々の生活を豊かにする上でも重要な意味をもっているように考えられる。

わが国においては、持続可能な資源の活用、自然環境の維持が急務である。そのために、森林の機能、森林とのかわり方が見直されるべきである。そして、林業の再生が不可欠である。教育の役割としても、森林への正しい認識を広めることが必要である。そのために森林に触れ、森林を学ぶ、森林で学ぶことにより、森林を通して様々な学びを深める機会を充実させることが求められる。